

## 「高齢社会イメージ」を規定する要因を探る

西村 久美子

### 1 はじめに

わが国で高齢化が社会問題としてさまざまな分野において取り上げられ、議論されるようになって久しい。人口の高齢化は平均寿命の伸びと出生率の低下によっておこるが、国連統計では全人口に対する 65 歳以上の高齢者の人口比率を高齡化率と呼んでいる(因みに高齡化率が 7%を超えると高齡化社会、14%を超えると高齡社会という)。日本では高齡者人口と 15 歳未満の人口は 1990 年代後半に逆転、その差は現在も開いており、2002 年に高齡者人口は 2400 万人弱で人口全体の 18.5%をしめることとなった。しかし問題は高齡化率の上昇というよりむしろ急激な変化にある。平成 13 年版高齡社会白書によると、高齡化を迎えた諸国における倍化年数(高齡化率が 7%から 14%になるのにかかる年数)は、ドイツでは 1932~1972 年の 40 年間、イギリスでは 1929~1976 年の 47 年間、アメリカは推計で 1942~2013 年の 71 年間、フランスでは 1864~1979 年の 115 年間である。日本の場合には諸外国においてこれまでに例をみない 24 年間という速さ(1970 年~1994 年)で高齡化を経験しており、人々の意識や社会の仕組みの切り替えなどが現実に追いついていない。さらに今後我々がむかえることになる「超高齡社会」は、まだどの国も経験していない未体験ゾーンなのである。

では人々は急激な高齡者率の増加や高齡社会についてどのような意識をもっているのだろうか。特に注目されるのが、高齡者福祉の問題である。このままでは破綻するといわれる医療や年金制度、2000 年施行の介護保険制度などにおける問題点の数々は我々にそうした制度自体についての再考を余儀なくさせている。平成 9 年の厚生白書では、加齡に対する誤解の数々を紹介している。そこでは、老化しているかどうかは年齢で決まる、高齡者のほとんどは健康を害している、高齡者は非生産的である、高齡者の頭脳は若者のように明敏ではない、高齡者は恋愛や性に無縁である、高齡者は誰も同じようなものである、などを取り上げ、その内容を検討し、問題点を解説している。

高齡者を福祉対象で、個性のない弱者としての高齡者の理解があるとともに、一方では様々な分野で活躍する高齡者、例えば 2003 年にエベレスト登頂に成功した三浦雄一郎氏やその父親である三浦敬三氏のような「老いてなお盛ん」な人々のイメージを強調する傾向もある。様々な能力をもった高齡者を活用し、高齡者の QOL 向上のための取り組みも様々になされている。平成 15 年度厚生労働白書では、「活力ある高齡者像と世代間の新たな関係の構築」をテーマに高齡期を「第 2 の現役期」として捉え直し、高齡者の社会参加により、現役世代の抱える問題解決に資する新たな世代間の支えあいを目指している。しかし高齡者はどのライフステージと比較しても個人差が顕著であり、非常

に多様な存在である。「健康で活発な高齢者」と「弱者としての高齢者」のみに焦点があたり、高齢者をステレオタイプのイメージでみることには問題がある。

また高齢者問題は女性の問題といわれるように、女性特有の問題や観点が考えられる。その理由の一つには、女性の方が高齢期に一人暮らしになる率が高いということがある（高齢者人口に対し、男性 8.0%、女性 17.9%）。女性は平均寿命が男性より長く、夫が妻よりも高齢であることが多いため、高齢になればなるほど一人暮らしになる割合は高くなる（80歳以上をのぞく）。さらに男性に比較し経済的に貧困な人が多い状況がある。因みに一人暮らしの男性の年収は 262.6 万円で女性は 172.6 万円、二人以上の世帯の個人収入は男性 319.6 万円、女性 94.7 万円である<sup>1)</sup>。しかしそれ以上に注目すべきは、妻や娘、息子の嫁が介護の主体とならざるを得ない現状である。1992 年の統計では主たる介護者の性別では女性が 83.2%、2001 年でも 77.1%となっている<sup>2)</sup>。

そこで本稿では、超高齢社会をむかえる日本の現状において、特に性差に注目し、「高齢社会イメージ」を規定する要因を探ることを目的とする。

## 2 設問と回答傾向

### 2.1 設問

本稿で使用する設問とその回答傾向は下記の通りである。

問 13 近年急速に高齢化が進んでいますが、そのことについてこの中のような意見があります。あなたはこれらの意見についてどう思いますか。

- a. 高齢者とのふれあいが増える社会になる
- b. 高齢者と若い層との意識の差が大きくなる
- c. 老化を防ぐために、お金や時間をかける人が増える
- d. 高齢者も住みやすい町づくりができる
- e. 家族の介護負担がますます重くなる
- f. 若々しくいることが価値をもつ社会になる
- g. 老後が不安な社会になる
- h. 生きがいを持った元気な高齢者が増える
- i. 政治における高齢者の発言力が増す

### 2.2 回答

これらの質問に対する回答傾向は図 1 の通りだが、高齢化の進むことについては、やや否定的な意見が肯定的な意見を上回っているように見える。家族の介護負担がますます

<sup>1)</sup> 平成 14 年版高齢社会白書

<sup>2)</sup> 厚生労働省大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」65 歳以上の要介護者と同居する主たる介護者の性別

す増えたり、老後が不安な社会になるという意見に同意している人は8割に近く、高齢者と若者の意識の差が拡大するという意見に同調する人も66%に達している。その反面高齢者とのふれあいが増えるとする人も67%存在する。

各質問の平均値は a が 3.83、b が 3.87、c が 3.82、d が 3.27、e はもっとも高く 4.17、f が 3.62、g が 4.06、h が 3.70、i がもっとも低く 2.99 である。なお選択肢はいずれも「1. そう思う」から「5. そう思わない」までの5段階だが、得点が高くなればなるほどその意見に対する同意度が高くなるように、「そう思う」を5に、「そう思わない」を1にと数値を再割当している。

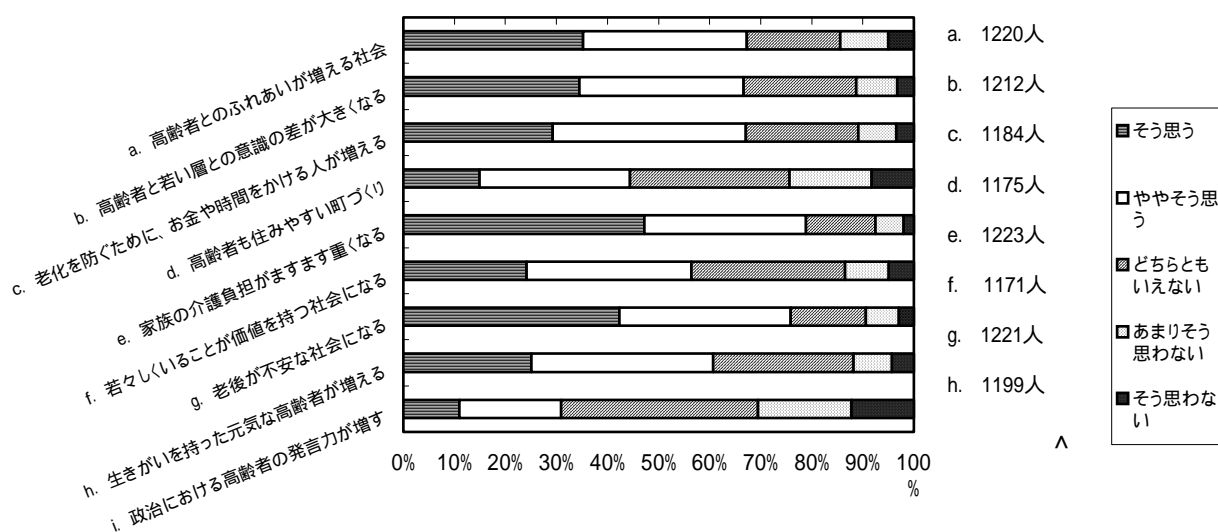


図1 高齢社会イメージ

### 3 分析に使う変数

#### 3.1 従属変数

本稿では高齢社会イメージを規定する要因を探ることを目的としている。そのため問13を用いて、主成分分析を行った。成分1は固有値が2.253、寄与率が25.0%。成分2は固有値が1.781、寄与率が約19.8%で、2因子で9変数の分散の44.8%が説明されている(表1)。成分3までを抽出すると累計寄与率が54.6%になるが、基準を固有値1以上としているので、第1と第2の2因子を抽出する。バリマックス回転後の成分行列も回転前のものと基本的に変化はなかった。

表1 「高齢社会イメージ」の主成分分析の結果

因子	固有値	寄与率 (%)
第1主成分	2.253	25.04
第2主成分	1.781	19.78
第3主成分	.882	9.80
第4主成分	.830	9.22
第5主成分	.772	8.58
計		72.42

因子は第5主成分まで記載

表2 「高齢社会イメージ」因子に対する負荷量

変数	成分1 因子負	成分2 因子負	共通性
	荷量	荷量	
生きがいをもった元気な高齢者が増える	.718	-.105	.527
高齢者も住みやすい町づくりができる	.691	-.197	.516
政治における高齢者の発言力が増す	.632	-.114	.412
高齢者とのふれあいが増える社会になる	.571	-4.48E-03	.327
若々しくいることが、価値を持つ社会になる	.524	.334	.386
老化防ぐため、金や時間をかける人が増える	.491	.337	.355
家族の介護負担がますます重くなる	5.993E-02	.741	.553
老後が不安な社会になる	-.120	.723	.537
高齢者と若い層との意識の差が大きくなる	-1.83E-02	.649	.421

変数はサイズにより並び替え。紙面の都合上、一行で記載できないものは一部変更

### 3.2 独立変数

人的属性である年齢、教育年数、世帯収入、ならびに因子分析で得た第1主成分の「将来への楽観的態度(問11)」、「不安意識(問21)」を独立変数として用いる。問11、問21の選択肢はいずれも「1.そう思う」から「5.そう思わない」の5段階だが、得点が高くなるほどその意見に対する同意度が高くなるように、「そう思う」を5に、「そう思わない」を1に再割当している。性別については分析の際に男女別で行う。「将来への展望」と「心の動揺」については、将来への展望が楽観的であるかどうか、また不安意識があるかどうかは高齢社会のイメージを規定する重要な要因と考えられるので、独立変数として使用する。「将来への展望」と「心の動揺」の因子分析の結果は次の通りである。

問11の主成分分析 分析の結果は以下の通りである。

表3 「将来への展望」の主成分分析の結果

因子	固有値	寄与率(%)
第1主成分	4.787	29.92
第2主成分	1.583	9.89
第3主成分	1.232	7.70
第4主成分	.949	5.93
第5主成分	.932	5.82
計		59.26

因子は第5主成分まで記載

表4 「将来への展望」因子に対する負荷量(バリマックス回転後)

変数	成分1因子	成分2因子	成分3因子	共通性
	負荷量	子負荷量	子負荷量	
仕事の内容は面白くなると思う	.758	1.389E-02	.151	.598
自分の生きる世界拡大、新しい可能性生まれる	.718	.255	-.103	.592
個人やりたい事今まで以上に実現しやすくなる	.650	.207	-3.60E-02	.467
人との交流範囲が広がると思う	.648	.142	1.724E-02	.440
働き口は増えると思う	.635	-3.24E-02	.151	.427
仕事の効率が上がり、楽になると思う	.604	.204	8.657E-02	.414
だれでも考えを発言できるようになると思う	.592	.230	.157	.428
生活が便利になると思う	.514	.433	-3.29E-02	.453
Computer や Internet 使いこなせないと不利	.101	.737	8.112E-02	.560
子供 Computer 技術や知識身に付けさせる良	.126	.697	.105	.512
コンピューター利用、就職や給与に影響	.129	.688	.119	.504
今より英語の重要性が増すと思う	.108	.538	.308	.396
インターネットは、高齢者も楽しめると思う	.391	.523	-.369	.562
今後、インターネットの講習を受けてみたい	.262	.367	-.176	.234
学歴の高い人がより成功するようになると思う	.252	2.759E-02	.682	.529
ますます時間に追われるようになると思う	5.523E-03	.211	.664	.485

変数はサイズにより並び替え。紙面の都合上、一行で記載できないものは一部変更

成分1は固有値が4.787、寄与率が29.9%、成分2は固有値が1.583、寄与率が約9.9%、成分3は固有値が1.232、寄与率が7.7%で、3因子で16変数の分散の47.5%が説明されている(表3)。成分4までを抽出すると累計寄与率が53.4%になるが、基準を固有値1以上としているので、成分4は抽出せず、第1、第2、第3の3因子を抽出する。バリマックス回転後、抽出された成分1を「将来への楽観的態度」、成分2を「手段積極的活

用態度」、成分3を「将来への悲観的態度」と命名し、因子得点して変数化した。これらの変数のうち「将来への楽観的態度」を独立変数として、クロス集計、相関ならびに重回帰分析に使用する。

問21の主成分分析 分析の結果は以下の通りである。

表5 「心の動揺」の主成分分析の結果

因子	固有値	寄与率(%)
第1主成分	3.256	54.27
第2主成分	1.050	17.50
第3主成分	.564	9.40
第4主成分	.446	7.44
第5主成分	.361	6.02
計		94.63

因子は第5主成分まで記載

表6 「心の動揺」因子に対する負荷量

変数	成分1因子	成分2因子	共通性
	負荷量	子負荷量	
不安になったり悩んだりすることがありますか	.839	-.230	.757
理由もなく何か不安に思うことがありますか	.831	-.192	.727
意気消沈し、しょげかえってしまうことがありますか	.818	-.222	.718
このままでは自分が駄目と感ずることがありますか	.788	-.213	.667
些細なルールへこだわり、その通りでないため	.519	.680	.731
気ぜわしく、じっと座っておられないことがありますか	.550	.635	.706

変数はサイズにより並び替え。紙面の都合上、一行で記載できないものは一部変更

問21を用いて、主成分分析を行った。成分1は固有値が3.256、寄与率が54.3%、成分2は固有値が1.050、寄与率が約17.5%で、累計寄与率が71.8%になる。また基準を固有値1以上としているので、第1と第2の2因子を抽出する。バリマックス回転後の成分行列も回転前のものと基本的に変化はなかった。

以上の因子分析より、抽出された成分1を「不安意識」、成分2を「神経症的意識」と命名し、因子得点して変数化した。これらの変数のうち「不安意識」を独立変数として使用する。

#### 4 分析

本稿では、「高齢社会イメージ」を規定する要因を探るために、まず従属変数に因子分析で得た「高齢社会プラスイメージ」と「高齢社会マイナスイメージ」を使用し、独立変数である年齢、教育年数、世帯収入、「将来への楽観的態度」、「不安意識」とのクロス

集計を行う。そしてこれらの変数の男女別相関を検討する。次に、「高齢社会プラスイメージ」と「高齢社会マイナスイメージ」、そして年齢、教育年数、世帯収入、「将来への楽観的態度」、「不安意識」、との重回帰分析を男女別で行い、比較分析する。

#### 4.1 クロス集計

クロス集計に使用するため、従属変数の「高齢社会プラスイメージ」<sup>3)</sup>と「高齢社会マイナスイメージ」<sup>4)</sup>、ならびに独立変数の年齢(3分割)、教育年数(3分割)、世帯収入(5分割)、将来への楽観的態度<sup>5)</sup>、不安意識<sup>6)</sup>の各変数をカテゴリ化した後、クロス集計し、性別を中心に分析する。

表7 高齢社会プラスイメージと独立変数との関連

カテゴリ	分類	高齢社会プラスイメージ(男性/女性)			
		弱い(%)	普通(%)	強い(%)	合計人数
年齢	20-39歳	41.9 / 32.5	34.7 / 36.5	23.4 / 30.6	124 / 160
	40-64歳	33.3 / 29.3	33.8 / 37.1	32.9 / 33.7	234 / 294
	65歳以上	37.4 / 30.1	26.7 / 23.3	35.9 / 46.6	131 / 103
	男性 V=.084      女性 V=.094*				
教育年数	実業・中卒	40.2 / 32.8	30.7 / 26.4	29.1 / 40.8	127 / 125
	高卒	38.1 / 33.0	29.8 / 34.4	32.1 / 32.6	168 / 218
	専・大卒	32.4 / 25.0	35.6 / 39.9	31.9 / 35.1	188 / 208
	男性 V=.054      女性 V=.087+				
世帯収入	250万円未満	34.9 / 21.7	44.2 / 40.0	20.9 / 38.3	43 / 60
	250-450万円未満	42.9 / 29.8	27.5 / 30.8	29.7 / 39.4	91 / 104
	450-650万円未満	37.5 / 40.0	32.5 / 28.2	30.0 / 31.8	80 / 85
	650-1000万円未満	29.5 / 21.4	34.1 / 44.3	36.4 / 34.3	88 / 70
	1000万円以上	28.8 / 20.4	30.3 / 35.2	40.9 / 44.4	66 / 54
	男性 V=.116      女性 V=.133				
将来への楽観的態度	楽観度低い	53.7 / 48.5	29.9 / 28.8	16.3 / 22.7	147 / 132
	楽観度普通	29.5 / 26.0	35.6 / 40.7	34.8 / 33.3	132 / 150
	楽観度高い	18.4 / 15.0	34.6 / 36.6	47.1 / 48.4	136 / 153
	男性 V=.243**      女性 V=.226**				
不安意識	不安意識弱い	35.8 / 36.9	26.7 / 30.5	37.6 / 32.6	165 / 141
	不安意識普通	33.7 / 32.3	37.4 / 34.4	28.8 / 33.3	163 / 195
	不安意識強い	39.3 / 23.0	33.3 / 38.0	27.3 / 39.0	150 / 213
	男性 V=.084      女性 V=.089+				

VはCramerの関連係数、\*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意、+は10%水準で有意を示す。

<sup>3)</sup>問 13a～i の因子分析によって得た第1主成分得点の3分割

<sup>4)</sup>問 13a～i の因子分析によって得た第2主成分得点の3分割

<sup>5)</sup>問 11a～p の因子分析によって得た第1主成分得点の3分割

<sup>6)</sup>問 21a～f の因子分析によって得た第1主成分得点の3分割

**高齢社会プラスイメージと各独立変数との関連** 表7の分析から、高齢社会プラスイメージと関連が大きいのは、将来への楽観的態度と考えられる。男女ともに、クramer-Vが0.2以上で、カイ二乗値も1%水準で有意である。女性のみ年齢では、クramer-Vの値は.01に達しておらず、関連は強くはないが、5%水準で有意である。教育年数と不安意識も女性では、10%水準で有意となっている。世帯収入については、男女ともクramer-Vの値は0.1以上だが、有意にはなっていない。

**高齢社会マイナスイメージと各独立変数との関連** 以下の分析で、高齢社会マイナスイメージと関連の強いものは、男性の不安意識で、クramer-Vが0.1以上で、1%水準で有意となっている。また同様に男性では、クramer-Vは0.1以下で、10%水準で有意となっているのが、年齢であった。その他の変数については、男女ともに強い関連はみられなかった。

表8 高齢社会マイナスイメージと独立変数との関連

カテゴリー	分類	高齢社会マイナスイメージ(男性/女性)			
		弱い(%)	普通(%)	強い(%)	合計人数
年齢	20-39歳	35.5 / 35.6	34.7 / 36.4	29.8 / 25.0	124 / 160
	40-64歳	32.5 / 31.6	27.4 / 32.0	40.2 / 36.4	234 / 294
	65歳以上	32.1 / 35.0	38.9 / 33.0	29.0 / 32.0	131 / 103
	男性 V=.091+ 女性 V=.076				
教育年数	実業・中卒	32.3 / 34.4	34.6 / 31.2	33.1 / 34.4	127 / 125
	高卒	29.8 / 33.9	32.1 / 33.9	38.1 / 32.1	168 / 218
	専・大卒	36.2 / 32.7	31.9 / 35.6	31.9 / 31.7	188 / 208
	男性 V=.050 女性 V=.025				
世帯収入	250万円未満	23.3 / 45.0	34.9 / 26.7	41.9 / 28.3	43 / 60
	250-450万円未満	28.6 / 29.8	37.4 / 36.5	34.1 / 33.7	91 / 104
	450-650万円未満	35.0 / 35.3	26.3 / 36.5	38.8 / 28.2	80 / 85
	650-1000万円未満	36.4 / 31.4	34.1 / 32.9	29.5 / 35.7	88 / 70
	1000万円以上	36.4 / 33.3	27.3 / 29.6	36.4 / 37.0	66 / 54
	男性 V=.093 女性 V=.088				
将来への楽観的態度	楽観度低い	36.7 / 31.1	27.2 / 31.1	36.1 / 37.9	147 / 132
	楽観度普通	27.3 / 39.3	35.6 / 33.3	37.1 / 27.3	132 / 150
	楽観度高い	34.6 / 29.4	35.3 / 38.6	30.1 / 32.0	136 / 153
	男性 V=.079 女性 V=.084				
不安意識	不安意識弱い	39.4 / 33.3	23.6 / 37.6	37.0 / 29.1	165 / 141
	不安意識普通	36.2 / 33.3	33.1 / 35.9	30.7 / 30.8	163 / 195
	不安意識強い	22.7 / 32.4	40.0 / 31.0	37.3 / 36.6	150 / 213
	男性 V=.127** 女性 V=.053				

VはCramerの関連係数、\*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意、+は10%水準で有意を示す。

## 4.2 変数間の相関関係

まずは、男女別で高齢社会プラスイメージと高齢社会マイナスイメージ、年齢、教育年



数、世帯収入、将来への楽観的態度、不安意識との相関係数をみてる。分析に用いる変数は以下の通りである（表9）。

表9 分析に用いる変数表

年齢	調査時年齢
教育年数	旧制尋常小学校=6年、旧制高等小学校=8年、旧制中学校・高等女学校=11年、実業学校=11年、師範学校=14年、旧制高校・専門学校・高等師範学校=14年、旧制大学=17年、新制中学校=9年、新制高校=12年、高卒後に入った専門学校=14年、新制短期大学・高専=14年、新制大学=16年、新制大学院=18年
世帯収入	なし=0、70万円未満=70、100万円未満=100、200万円未満=200、300万円未満=300、400万円未満=400、500万円未満=500、600万円未満=600、700万円未満=700、800万円未満=800、900万円未満=900、1100万円未満=1100、1300万円未満=1300、1500万円未満=1500、1700万円未満=1700、1900万円未満=1900、2300万円以上=2300
将来への楽観的態度 不安意識	問 11a～p の主成分分析によって得た第 1 主成分得点 問 21a～f の主成分分析によって得た第 1 主成分得点

高齢社会プラスイメージと各変数間の相関 分析結果は以下の通りである。

表 10 高齢社会プラスイメージとの相関係数

	全体	n	男性	n	女性	n
年齢	.098**	1046	.091*	489	.110**	557
教育年数	.048	1034	.073	483	.024	551
世帯収入	.104**	741	.164**	368	.054	373
将来への楽観的態度	.391**	850	.394**	415	.388**	435
不安意識	.009	1027	-.119**	478	.115**	549

\*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意、+は10%水準で有意を示す。

全体でみると、高齢社会プラスイメージと有意な関連があったのは、年齢と世帯収入、そして将来への楽観的態度（それぞれ1%水準で有意）であった。すなわち年齢が高くなるほど、世帯収入が多いほど、そして将来への楽観的態度が強いほど高齢社会プラスイメージが高まるということである。

男女差があったのは、世帯収入と不安意識である。男性では世帯収入が高いほど高齢社会プラスイメージが高まるが、女性では有意でなかった。特に違っているのが、不安意識で、男性の場合には、不安意識が弱いほど高齢社会プラスイメージが高まるが(-.119\*\*)、女性では逆に、不安意識が強いほど高齢社会プラスイメージが高まる(.115\*\*)という結果がでた。

高齢社会マイナスイメージと各変数間の相関 分析結果は以下の通りである。

表 11 高齢社会マイナスイメージとの相関係数

	全体	n	男性	n	女性	n
年齢	.075*	1046	.064	489	.085*	557
教育年数	.000	1034	-.025	483	.027	551
世帯収入	-.006	741	-.037	368	.021	373
将来への楽観的態度	.008	850	.003	415	.014	435
不安意識	.089**	1027	.111*	478	.071+	549

\*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意、+は10%水準で有意を示す。

高齢社会マイナスイメージと有意な関連があった変数は、高齢社会プラスイメージと比較すると少なくなっている。全体でみると不安意識（1%水準で有意）と年齢（5%水準で有意）であった。すなわち不安意識が増すほど、年齢が高くなるほど、高齢社会マイナスイメージが高まるということである。男女差があったのは年齢で、女性では5%水準で有意であったが、男性は有意ではなかった。また有意差はでていないが、教育年数と世帯収入については、男性ではマイナスの値で、教育年数が長くなったり、世帯収入が高くなるほど高齢社会マイナスイメージが少なくなる傾向を示しているが、女性ではそうではなかった。

### 4.3 重回帰分析

前項では年齢、教育年数、世帯収入、将来への楽観的態度、不安意識といった項目と、高齢社会プラスイメージと高齢社会マイナスイメージとの相関関係を検討した。そこで本項では、高齢社会イメージがどのような要因によってどの程度規定されているのかを明らかにするために重回帰分析を行う。

**高齢社会プラスイメージに対する重回帰分析** 分析の結果は以下の通りである。

表 12 高齢社会プラスイメージに対する重回帰分析

独立変数	全体	許容度	男性	許容度	女性	許容度
年齢	.156**	.792	.127*	.772	.178**	.744
教育年数	.018	.745	.055	.771	-.025	.688
世帯収入	.020	.877	.076	.881	-.031	.858
将来への楽観的態度	.408**	.949	.405**	.958	.378**	.927
不安意識	-.021	.927	-.170**	.898	.136*	.938
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.177**		.218**		.193**	

従属変数は「高齢社会プラスイメージ」 \*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意、+は10%水準で有意を示す。

決定係数R二乗値は、全体が.177、男性だけが.218、女性だけが.193で説明力としてはま

ずまずといえる。標準偏回帰係数（以下 と略）の値と相関係数の値を比較してみる（表10と表12）。高齢社会プラスイメージに寄与している要因を影響の強い順に整理すると以下のようなになる。

将来への楽観的態度は、強い影響力（ $\beta = .408^{**}$ ）が見られる。男女別でも同様である。これは単相関と変らない結果である。

年齢も、高齢社会プラスイメージに影響している（ $\beta = .156^{**}$ ）。男女別でも同様であるが、特に女性にその傾向が強い（ $\beta = .178^{**}$ ）。これも単相関と変らない結果である。不安意識については、全体では $\beta = -.021$ で有意とならなかった。これは男性の場合には、不安意識が高齢社会プラスイメージにマイナスの影響を及ぼしているが（ $\beta = -.170^{**}$ ）、女性では、逆に不安意識が高齢社会プラスイメージにプラスの影響を及ぼしている（ $\beta = .136^*$ ）という結果がでており、そのためこのような値がでていいると考えられる。これは単相関と変らない結果である。

世帯収入は、単相関では男性で有意な関係がみられたが、重回帰分析では全体（ $\beta = .020$ ）、男性のみ（ $\beta = .076$ ）ともに高齢社会プラスイメージにほとんど影響していない。女性のみ（ $\beta = -.031$ ）もほとんど影響していないが、マイナスの値となっている。

教育年数は、全体（ $\beta = .018$ ）、男性のみ（ $\beta = .055$ ）ともに高齢社会プラスイメージにほとんど影響していない。女性のみ（ $\beta = -.025$ ）もほとんど影響していないが、マイナスの値となっている。単相関においても同様の結果である。

**高齢社会マイナスイメージに対する重回帰分析** 分析の結果は以下の通りである。

表 13 高齢社会マイナスイメージに対する重回帰分析

独立変数	全体	許容度	男性	許容度	女性	許容度
年齢	.082+	.792	.139*	.772	.001	.744
教育年数	-.059	.745	-.032	.771	-.111	.688
世帯収入	.017	.877	-.010	.881	.055	.858
将来への楽観的態度	.001	.949	.006	.958	.001	.927
不安意識	.114**	.927	.137*	.898	.099	.938
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.020*		.030		.019	

従属変数は「高齢社会プラスイメージ」

\*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意、+は10%水準で有意を示す。

全体の決定係数R二乗値は.020で説明力としては十分ではないが、5%水準で有意である。の値と相関係数の値を比較してみる（表11と表13）。高齢社会マイナスイメージに寄与している要因を影響の強い順に整理すると以下のようなになる。

不安意識は、全体では高齢社会マイナスイメージに影響している（ $\beta = .114^{**}$ ）。これは単相関の結果と変らなかった。男女別では男性のみで、不安意識が影響を及ぼしてい

るという結果がでた ( $\beta = .137^*$ )。

年齢もそれほど強くはないが、高齢社会マイナスイメージに影響している ( $\beta = .082+$ )。これは単相関の結果とあまり変らなかった。男女別では男性のみで、年齢が影響を及ぼしているという結果がでた ( $\beta = .139^*$ )。

教育年数は有意ではなかったが、単相関との結果が異なっていた。単相関では男性のみがマイナスの値であったが、 $\beta$  は、全体、男女ともマイナスであった。

世帯収入も有意ではなかったが、単相関との結果が異なっていた。単相関では全体と、男性のみがマイナスの値であったが、 $\beta$  は、男性のみマイナスであった。

将来への楽観的態度は、全体、男女ともにマイナスの効果まではでなかったが、有意な値はでなかった。

この結果から本稿で分析に使用した独立変数は高齢社会プラスイメージの説明力に比較し、高齢社会マイナスイメージの説明力としては、効果が低いことがわかった。男女差があったのは、年齢、不安意識、世帯収入である。男性では年齢が高齢社会マイナスイメージに影響をおよぼしているが、女性ではそうではなかった。不安意識についても男性では有意差がでているが、女性ではでなかった。

## 5 まとめと考察

本稿は「高齢化」の進む社会における現状において、わが国の人々が高齢社会というものをどのように捉え、何がそうしたイメージの形成に影響を及ぼしているのかを検証することを目的としていた。高齢社会における現状での女性の役割や問題点の多さから高齢社会へのイメージにも性差が反映されると予測し、性差に焦点をあてた分析を行った。ここでこれまでの分析結果をまとめる。

高齢社会プラスイメージとの強い関連がみられ、因果関係も確認できたのは男女ともに将来への楽観的態度であった。

高齢社会プラスイメージとの関連がみられ、因果関係も確認できたのは年齢であった。特に女性ではより強い関連と因果関係がみられた。

高齢社会プラスイメージとの因果関係は確認できなかったが、男性では10%水準で相関がみられたのが世帯収入である。

男女によって反対の結果がでたのが、不安意識である。男性では高齢社会マイナスイメージとの関連がみられ、因果関係が確認できた。しかし女性では高齢社会プラスイメージとの関連がみられ、因果関係も確認できた。

教育年数は高齢社会プラスイメージと関連もみられず、因果関係も確認できなかった。高齢社会マイナスイメージと関連がみられ、因果関係も確認できたのは不安意識であったが、男女別では男性のみに有意であった。

高齢社会マイナスイメージと関連がみられ、強くはないが、因果関係も確認できたのは年齢であったが、男女別では男性のみで有意であった。

世帯収入、教育年数、将来への楽観的態度は高齢社会マイナスイメージとの関連ならば

に因果関係は確認できなかった。

以上から、高齢社会プラスイメージを形成する要因としては、まず将来への楽観的態度、そして年齢があげられる。高齢社会マイナスイメージを形成する要因としては、不安意識と年齢があげられる。

将来への楽観的態度については、これは推測されたように、何事につけても楽観的であるということは、高齢社会に対してもやはり楽観的であり、楽観的なイメージをもつ傾向のあることが確認されたといえる。高齢社会マイナスイメージへのマイナスの影響はなかったものの、有意にはならず、妥当な結果といえる。

年齢については、高齢社会プラスイメージとの関連や影響が強いことが確認されたが、年をとるほどに、高齢社会に対してプラスイメージをもつようになるとか、反対にマイナスイメージをもつようになるというのではなく、ここには性差が大きく影響していた。女性の場合には、年齢が高齢社会プラスイメージに影響し、年齢が高くなるほど高齢社会プラスイメージも強くなり、男性の場合には、反対に年齢が高齢社会マイナスイメージに影響し、年齢が高くなるほど高齢社会マイナスイメージが強くなっていった。自分自身が高齢期に近づくこと、そして家族の介護の問題が実際のものとして感じるようになることで、「高齢社会」への期待と不安感が大きくなる傾向があるのではないかと推察された。

世帯収入については、高齢社会プラスイメージ・マイナスイメージともに因果関係は確認できなかったが、男性では10%水準で高齢社会プラスイメージとの相関がみられた。収入が高いことはプラス材料ではあれ、それがそのまま高齢社会プラスイメージとは結びつかないということであろうか。

男女による差の大きかったのが、不安意識である。前述したように男性では高齢社会プラスイメージとは、マイナスの関連と因果関係があり、高齢社会マイナスイメージとはプラスの関連がみられ、因果関係も確認できた。しかし女性では高齢社会プラスイメージとの関連がみられ、因果関係も確認できた。不安意識が強ければ、高齢化の進む社会に対してもいいイメージは持ちにくいと考えれば、男性の場合は順当な感覚とも思える。しかし女性の場合なぜ不安意識の強まりと高齢社会プラスイメージの高まりが結びつくのか、さらなる確認が必要と考える。

高齢社会マイナスイメージを形成する要因としては、男性の場合には年齢と不安意識に関連があり、因果関係も確認できた。しかし女性に関しては今回の分析では明確な結果はせず、このことから高齢社会マイナスイメージを形成する要因をより明確にできる独立変数についての再考が今後の課題であると考えられる。

## 6 参考文献

伊藤公雄・牟田和恵編、1998、『ジェンダーで学ぶ社会学』 世界思想社

伊藤まゆ・田中重人、2001、「意識の中の高齢社会」川端亮・田中重人編『吹田市民のコミュニティ・ネットワークに関する調査報告書』大阪大学大学院人間科学研究科 先進経験社会学、124-32

岩淵亜希子・直井優、2003、「『高齢社会イメージ』の意識構造とその世代差 - 2001 年度『情報社会に関する全国調査 (JIS)』データを用いて - 』『大阪大学大学院人間科学研究紀要』第 29 巻

岩淵亜希子・直井優、2003、「社会観としての『高齢社会イメージ』とその特徴」『大阪大学大学院人間科学研究紀要』第 29 巻

川端亮・田中重人編『高槻市民のコミュニティに関する意識調査』大阪大学大学院人間科学研究科 先進経験社会学研究分野：114-125

厚生省編、2003、『平成 9 年度版厚生白書、「健康」と「生活の質」の向上をめざして』(株)ぎょうせい

厚生労働省、2003、『平成 15 年度版厚生労働白書、活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築』(株)ぎょうせい

柴田博・芳賀博・古谷野亘・長田久雄、1985、『間違いだらけの老人像』川島書店

ダグラス・H・パウエル、久保儀明・榎崎靖人訳、2001、『< 老い > をめぐる 9 つの誤解』青土社内閣府編、2001、『平成 14 年度版 高齢社会白書』財務省印刷局

西田亜希子、2002、「なぜ学歴主義は支えられつづけているのか - 男女差の比較による一考察 - 』

富士谷あつ子・伊藤公雄監修、2000、『ジェンダー学を学ぶ人のために』世界思想社